経　　済

西　向　嘉　昭

ラテン・アメリカ経済に着目すれば，この地域の近代化は第２次大戦後に始まった。ここに近代化というのは，広義の工業化（工業主義）を通じての経済自立の達成過程である。さらに経済自立の意味するところは，対外均衡と対内均衡の達成である。

近代化をそのにない手である経済人のイデオロギーに即してみれば，少なくとも戦前においては輸入されたイデオロギーであった。つまり，ラテン・アメリカの後進性の真の原因とその除去策についての地域固有のイデオロギーは生まれなかった。１９世紀の経済的自由主義の時代においては，地域の後進性はラテン・アメリカ人自身の民族的欠陥の所為とされ，一部におこった保護主義思想においても，後進性の原因は国際収支の赤字に求められた。世界恐慌はこの地域に経済政策革命と称されるほどの政策変化を余儀なくしたが，これも本質においては１次産品輸出を促進するとともに，輸入を抑えるという貿易・為替政策が主体であった。したがって，戦前の工業化は，経済の対外脆弱性の是正，すなわち先進工業国と１次産品輸出国の本質的差異の認識に基づくものではなく，むしろ貿易・為替政策の副産物としておこったものであった。しかし，この時期に地域固有の経済発展のイデオロギーが形成される素地が培われていった。それが戦後のプレビッシュ・ＥＣＬＡ理論として結実することになる。

戦後のラテン・アメリカの経済発展は，主として輸入代替のための工業化を中心にめざましいものがある。にもかかわらず，ラテン・アメリカ社会の停滞性や封建性がしばしば論述される。それは，基本的には先進国の工業化過程とラテン・アメリカのそれとの質的相違に根ざすものであろう。しかし，ラテン・アメリカ社会は，いわゆる伝統的社会のように閉鎖的，硬直的なものではない。その基本的構造に著しい変化なしに種々の近代化の要素を吸収し得る伸縮性を示している。工業化に伴なう都市集中化，経済における政府部門の役割の増大，人口のより大なる政治参加などがその証拠である。しかし，これらは人口の一部についてのみ見られる現象であって，大部分の人口の生活水準改善や政治過程への参加の機会は，依然として従来のままにとり残されている。いわゆる経済的・社会的不平等がますます拡大する傾向にある。

経済が停滞している限り，近代化のための社会的諸条件の改善は困難である。しかし，経済が急速に発展しても，経済的・社会的不平等が是正される保証は全くない。経済的動態を社会

的動態にいかにして結びつかせるか。ここにラテン・アメリカの近代化のための基本的な課題がある。

社 会 思 想

グスタボ・アンドラーデ

主として倫理感の立場からラテン・アメリカの近代化を日本の近代化との比較において検討してみたい。日本が明治維持以後，急速に近代化の過程をたどったことはいまさらいうまでもないことであるが，それをラテン・アメリカの近代化の歩みと比較して，最も顕著な相違点は"明日に対する態度"である。

日本の場合は，当時外敵に侵され，西洋の植民地化する危険があり，この危険から国を守るため団結して立ち上がる必要があった。つまり，明白に不安があるために，今日はできるだけのことをやるという勤勉家の精神が培われたのである。これに対し，ラテン・アメリカは異なった文化に脅かされたのは１６世紀のことであり、近代化に当たって激しい文化の対立はなく元来，西洋のものに対する違和感はほとんどないといってよい。したがって，明日への不安がなく，明日に対しては新しい可能性と希望を持っている。つまり Hasta manana ということになり，近代化のテンポはおのずから遅くなった。しかも西洋文化を早々と受け入れたものの，その社会構造は旧態依然としており，近代化の要件は十分でない。そこで，理想と現実のギャップが生じ，その帰結として"急がず少しずつやる"という態度になったものと思われる。

ラテン・アメリカがこのような態度をとるに至っている要因としては，才１にこの地域が熱帯ないしは亜熱帯にあり，気候的条件から明日には熱意のない態度を示していることである。才２は自然資源の賦存状態から，少し努力すれば生活できるということである。才３は宗教の影響である。日本は徳川時代にすでに宗教が世俗化して現世的なものになっていたのに対し，ラテン・アメリカの場合はキリスト教が希望をもたらす信仰としての安心感を人々にもたらし依然として価値感の形成に大きな影響を与えていることである。ラテン・アメリカの近代化を考える場合は，こうした倫理感の相違を看過してはならないと思う。

（文責　水野　一）